

# 第6回 Web インテリジェンスとインタラクション研究会 学生参加報告

2006年7月10日

## 1 はじめに

平成18年7月3日(月)・4日(火)に、北海道札幌コンベンションセンターにて、第6回WI2研究会が開催された。

今回の研究会では、従来のロング発表に加えてショート発表も試みられ、多彩な研究発表と質疑応答が行われた。本報告では、研究会の概要を述べ、また報告者が興味深く感じた発表のうち幾つかを紹介する。



図1 会場の様子

2. 情報検索とインターフェイス (5件)
3. ニュース配信とトピック分析 (4件)
4. ショート発表 (13件)
5. 自然言語処理技術と評価型ワークショップの動向 [チュートリアル] (3件)

チュートリアルでは自然言語処理技術の応用例として、質問応答技術とテキスト自動要約技術の紹介と、それらの評価のためのテストコレクション利用についての発表があった。



図2 チュートリアルの様子

## 2 研究会の概要

第6回WI2研究会の参加者は71名であった。また、26件の発表と、3件のチュートリアルがあり、次のような内容であった。

1. テキストマイニング (4件)

## 3 研究発表

ここでは、第6回WI2研究会発表の中で報告者が興味深いと感じたものを報告する。

石谷氏ら(東芝)の「連鎖検索と近傍検索に基づくWebコンテンツへの効率的なアクセス手法」では、「ながら検索」を行うために連鎖検索と近傍検索と

言う2種類の検索方法を利用している。連鎖検索とは、ユーザがマーキングした語をキーワードとした検索結果に対し再びユーザがマーキングする事で連鎖的に検索が行われる手法で、マーキングと検索結果表示と言うインタラクションを通じて目的の情報へと導いている。近傍検索とは、検索や閲覧、スクラップに関する履歴情報からの情報アクセスのことである。また、連鎖検索ではマーキングされた語の周辺語句から検索意図の推定が行われている。この研究で興味深く思ったことは、一回の検索で解ページを得るのではなく、ユーザとのインタラクションを通じて解ページに近づくことで、また情報履歴との連携が「ながら検索」に適していると思われた点である。

大坪氏(デンソーアイティラボラトリ)の「Gards-変化し続ける興味に対応する情報探索」では、従来の情報推薦技術の様に時間をかけてユーザの嗜好モデルを学習し推定するのでは無く、できる限り多くの情報を提示しユーザに取捨選択させると言うインタラクションを通して解への到達を目指している。この研究は、「人間の嗜好は固定化されおらずユーザが目にするものに影響を受ける」「推薦の正解とはユーザが満足するものであれば良く、システム使用前にユーザが想定していたものが正解とは限らない」という立場から行われており、頻繁に変化するユーザの嗜好に対して的確な推薦が行えている。

吉田氏ら(NTTサイバーソリューション研究所)の「寄り道おすすめサービスのための時刻別ユーザ行動の考察」は、寄り道推薦システムのための時刻別ユーザ行動調査の報告である。外出時のユーザ動向については、報告者が個人的に興味がある内容であり、ユーザ調査の結果は大変参考になった。調査結果の概要は、待ち合わせ時間に10分程度の余裕時間しかない場合は目的地で待つことが多いが、15分以上ある場合は時間帯により行動パターンが変化する。15時までは目的地で待つ場合と付近探索がほぼ同数であるが、17時を過ぎると目的地で待つ人が多くなる。また、時間に関わらずコンビニで待つ人が15%程度いる、などというものであった。こう

した調査結果を元に、時間帯や余裕時間を考慮したユーザ支援を検討いかなければいけない。

亀山氏ら(北海道大学)の「質問応答における知識源選択規則の自動獲得と適応」では、質問応答システムにおいて単一の知識源から応答を作成するのではなく、新聞記事とWebと言う異なる二つの知識源を組み合わせることでより精度の高い応答を実現しようとしている。質問応答システムの知識源は、従来は新聞記事のみやWebのみなどのように単一のデータに限っていることが多いが、各知識源には、例えば新聞記事は信頼性は高いが話題性の低い情報は少ないなど一長一短がある。そこで、知識源を複数用意し、質問内容に適していると思われる方を選択する工夫がなされている。実験によれば、単一知識源を用いる場合に比べ、応答の正解率が向上したことが報告されている。

#### 4 終わりに

今回初めて研究会に参加したが、大学関係者だけでなく企業関係者もたくさん参加しており、色々な視点からの発表で大変興味深かった。



図3 懇親会の様子

また、質疑応答における議論が活発なだけでなく、懇親会においても多くの意見交換が行われており、大変有意義な時間を過ごす事ができた。

(川本 淳平 / 京都大学工学部情報学科)